

■学校経営のポイント

おしゃべりタイム

喜名 朝博

昨年の新語大賞は「言語化」。今でも、書店には「言語化」を冠した本が多く並んでいる。

言語化は、単に言葉にするという意味ではなく、自分の思考や気持ちを深く掘り下げて明確にするという意味を含む。情報が溢れるなかで、いかに他者の心に響く言葉を生み出し、発信できるかが重要になっている。

スキルとしての言語化能力

メールやSNSでは、表情や場の空気といった非言語的情報に頼ることができない。結果、意図や状況を正確に伝えるために、より言葉による明確な伝達が求められるようになってきた。

とくにビジネスの世界では、キャリアアップのために、自分のビジョンや強み、課題を明確にして他者へ伝えたり、自分自身で認識したりする必要がある。今や言語化能力は重要なビジネススキルである。

言語化を避ける子どもたち

今年度の全国学力・学習状況調査の結果では、思考力や表現力などを問う「記述式」の問題で平均正答率が低くなる傾向が明らかになった。さらに、記述式での無答率の高さも指摘されている。

子どもたちは、言葉にすること、言語化を避けているように見える。文章を読む、考える、言葉(文字)にするという手続きの多さが、苦手意識を生むのだろうか。短く単純な文章に慣れてしまったことも、言語化に必須である語彙力を低下させている。

対話的な学びと言語化

脳内言語(内言)を文字言語や音声言語に言語化(外言)するには、その語彙力とともに論理的思考力が必要となる。

前回の学習指導要領で言語活動が重視されたの

は、言語活動による思考力育成がねらいだったはずだが、活動そのものが目的化してしまった。

現行の学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びを目指して授業改善が進められている。とくに、対話的な学びを実現するため、話し合いという学習活動が重視されるようになった。

しかし、意見を伝え合うことばかりに目が向き、自分の考えを整理したり、外言化したりする時間を十分に確保できていないということはないだろうか。いきなり言語化することはむずかしい。準備の時間が重要なのだ。

日常会話を大切に

子どもたちは、授業中の言葉と仲間との言葉を使い分けている。学びに向かう姿勢として、それも大切なことだが、言葉を学びの道具として考えれば、日常の会話こそ言語化能力育成の鍵となる場面となるはずだ。

子どもたちも忙しく、登下校や遊びの中での会話はあがるが、いわゆる話すこと自体を目的とした時間は少ない。それでも、中学生ぐらいになると、下校時に立ち話をしたり、座り込んで話したりしている様子も見かける。子どもたちは仲間とずっと話したいのだ。

おしゃべりタイムで人間関係をよくする

そこで、授業開始前などのちょっとした時間におしゃべりタイムを設けよう。仲間と話すことで、「聴いてくれた」「伝わった」といった小さな成功体験を重ねることができる。それが言語化能力の原点となるだけでなく、人間関係をよくする。さらに、おしゃべりによって幸せホルモンが分泌されることも分かっている。

教師も忙しいが、子どもたちとずっとおしゃべりをしよう。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

学校管理職の “こじらせない” 保護者対応

(11/20 発売)

【編集】『教職研修』編集部

本の詳細およびご予約は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。

